－所蔵作品紹介－

黒蕨　壮　KUROWARABI Soh

明日へのとびら

あすへのとびら

作品データはこちら

「なぜ、首がないのだろう？」「なぜ、腕が離れているのだろう？」「なぜ、タンスがまがっているのだろう？」…。数ある当館の木の現代造形コレクションのなかでも、これだけ多くの「なぜ？」を来館者の心に生じさせる作品も珍しいかもしれない。実はこの男は透明人間で、離れた腕の先は異次元空間へとワープしているのでは…？などと、見ているうちに想像はどんどんふくらんでくる。思い切った空間構成によって、視覚的な驚きと、想像する楽しさを一度に体験させてくれるのが、この作品の大きな魅力の一つといえよう。

それと同時に、目をひきつけられるのが、人物の体のきわめて精緻でリアルな表現である。ジーンズにスニーカー、金ボタン付きのジャケットを羽織ったラフなスタイルの男は、見るからにがっしりとした体格をしている。布の起伏や皺が丁寧に再現された衣服を通して、筋肉の張りや動き、そして体温までもが伝わってくるようである。そうした生命感に満ちた表現と、首と腕からのぞく空虚な断面のなんとも対照的な取り合わせに、見る人を惑わす軽妙なトリックのセンスがうかがえる。人物とタンスは、いずれも高度な寄木の技法によってつくられており、作者の木工技術の確かさが十分に生かされた作品となっている。

この作品は、1996年に当館で開催された全国の木の造形作家の指名コンペ展「木の造形・旭川大賞」展で大賞を受賞した。作家の黒蕨壮は、鹿児島出身、名古屋在住で、第１回現代日本木刻フェスティバル（1988年、岐阜県関市）でも大賞を受賞するなど、幅広い活躍をみせている。ちなみにこの人物像は作家本人の姿でもあるという。作品に寄せられた「―記憶のとびらを開いても探しものはみつからない。前へ進むしかない。思い切って明日へのとびらを開いてみよう。」という言葉は、作家自身の人生や創作へのポジティヴな姿勢を物語っていよう。とはいえ、切り離れた腕と腕の間には、自らのおかれた現状を打破したいと願いつつも、なかなか踏み出せずに逡巡する思いが漂っているようでもある。首のない人物像は、同様の思いを抱えて生きるすべての人々の姿にもあてはめられよう。ずらりと並んだ引き出しの中には、いったいどんな未来が待ち受けているのか。切り離されてもなおかつ、ぐいと力強く引き出しを引っ張り出す手には、明日へのとびらを開ける決意と勇気がみなぎっている。

旭川美術館だより「氷華」No.40（1999.３発行）「収蔵作品から」より